

## 平成 24 (2012) 年度 第 1 学期 国語科における授業実践記録

### Report on Teaching Practice in National (Japanese) Language in the First Semester of SY2012

国語科

荻野聡 愛甲修子 石川直美 山根正博  
宇佐見尚子 西村諭 杉本紀子

本校では、1 学年から 4 学年までは、日本の学習指導要領と国際バカロレアの MYP (Middle Years Program) プログラムに基づいた指導を行っている。このプログラムでは、目標を細分化して生徒に提示するのが特徴である。5 学年と 6 学年は MYP プログラムの対象外ではあるが、その方向性の上にあると考え、4 学年までと同じように細分化した目標を設定し、6 か年の中で、学習内容・目標段階を、螺旋状に繰り返すことにより、着実に力をつけるカリキュラムを作り上げていきたいと考えている。

たとえば、発表学習においては、1 学年では、AOI (MYP における教科を超えた学習領域。「Area of Interaction」と名付けられ、「学習の姿勢」「人間的創意」「コミュニティと奉仕」「環境」「健康と社会教育」の 5 領域に分かれる) の「学習の姿勢」と関連させ、発表の基本である効果的な話し方と聞き方を学習する。3 学年においては、情報を効果的に活用し、それを分かりやすく伝える方法を学ぶ。最終学年である 6 学年では、主張にあった資料をどう提示し、いかに説得力のある発表をするかの工夫ができるようになる。

また目標で言えば、4 学年で達成すべき目標「多様なテキスト様式で、構成と言語固有の慣例を用いた作品をつくることができる。」「考えと主張を、持続的で一貫性と論理性のある方法で構成して作品をつくることができる。」を、その後の 2 年間でさらに習熟・発展させる。4 学年でその目標に到達できなかった生徒も、続く 2 年間で到達することができる。

どの学習においても、その学習で目指すことと、学習者自身がどこまで到達できたかを確認しながら進めるので、個人の目標も明確になる。また、指導者や題材が変わっても、最終的な到達目標や積み重ねのステップは変わらないので、学年間の連携がしやすい。

こういったことを踏まえ、各学年での実践を重ねながら、目標と評価の連関について研究を深めていくことが、今後の課題である。

次ページから、2012 年 6 月に開催した公開研究会時の公開授業の資料を載せた。各学年の授業においては、MYP における目標や Unit Question も設定しているが、そちらについては公開研究会時に配布した冊子を参照されたい。

続いて、今年度 1 学期に、1 学年から 6 学年において展開された国語科の授業実践を表に示した。冒頭で述べたように、第 1 学年から第 4 学年までは MYP に基づくものでもあるため、MYP において単元作成に必要とされている、AOI と、単元ごとの Guiding Question を記載した。

AOI のどの領域に関連させるかは、各学年の授業担当者の判断による。基本的には常に「学習の姿勢」が基盤にあるが、教材で扱うテーマや学習活動によって関連する領域を判断している。

## 「わたしのたからもの」

### 効果的な聞き方、話し方

国語科 荻野 聡

#### 授業概要

単元名 「わたしのたからもの」

日時 平成24年6月23日（土） 第1限

教室 W201教室

対象 1年2組 27名

教材 「私のお気に入り」を友達に伝えよう」（学校図書 中学1年）

#### 単元の指導目標

- ・自分の伝えたい内容を整理してわかりやすく伝えることができる。
- ・具体物の提示の仕方をはじめ、スピーチ全体の構成を工夫することができる。
- ・友達の発表から、積極的にその良さをみつけようとするすることができる。

#### 単元の評価基準

関心・意欲・態度	・自分の「たからもの」を積極的に皆に伝えようとしている。 ・スピーチを聞き、他者を理解しようとしている。
話す能力	・わかりやすく伝えるために、スピーチ全体の構成を工夫している。 ・適切な音量、言葉遣いを用いている。
聞く能力	・他者の発表の良さを積極的に発見し、自分の発表に活かそうとしている。

#### 指導にあたって

##### 単元観

本単元では、自分自身が大切にしている「たからもの」をスピーチで発表しあう言語活動を設定した。ここでは、話したい内容を整理してわかりやすく伝える力と、具体物の示し方を工夫し、スピーチ全体の構成を工夫する力を高めることをねらいとしている。また、同時に「聞く」という活動にも焦点をあてて、他者の人間性を能動的に認めようとする生徒を育てたい。なお、今まで一年生では、文学的文章と説明的文章の読解について学習を進めてきた。そのなかで、個人やグループで気づいたことや考えたことを発表することは経験してきているが、本格的に発表学習に取り組むのは初めてである。今後の発表学習を有効に機能させるための基礎固めとして本単元を設定している。

また、本單元には「聞く・話す」ことばの力を高めるといふねらいのほかに、生徒間の人間理解を深めるといふねらいがある。学校生活だけでは知りえない友達の新たな一面を知ること、他者を理解しようとする態度を身につけさせたいと考えている。

### 生徒の実態

本校に入学して、二ヶ月ほどが経過した。今までと大きく変わった生活環境にも少しずつ慣れてきている時期である。生徒たちは、4月に入学してから、5月には富士ワークキャンプを、6月にはスポーツフェスティバルをすでに経験しており、行事や日常の学校生活を通じて互いに親交を深めてきている。

しかし、生活をともにしている友達のことで、知らずにいる一面がまだある。本單元では、自分が大事にしているものやお気に入りのものをスピーチで紹介しあうことで、今まで知らなかった友達の新しい一面を知り、互いに理解を深めていくことを期待する。また、中学校に入学したばかりのこの時期は、多くの生徒が「自分自身とは何か」と自らのアイデンティティを確立するために悩みを抱える時期である。自らの興味や関心事などを考えながら自分自身の内面を探ることで、自身を見つめ直す機会とすることもできるだろう。

授業クラスの生徒は、全員が附属大泉小学校からの内部進学生である。すでに6年間学校生活をともにしてきた仲であるが、この年頃の生徒は日々変化を積み重ねながら成長している。自分の「たからもの」について「話す・聞く」言語活動を通じて、友達についてあらためて見直す契機となることを期待している。

### 単元の指導計画と評価計画

時	指導計画（全7時間）	評価
0次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教師のスピーチ例を聞き、学習活動の目的について考える。</li> <li>・自分にとっての「たからもの」を探す。</li> <li>→自分にとって価値のある品物、思い出がある品物</li> </ul>	※二週間の準備期間をおく。
1次  3時間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の「たからもの」と、それにまつわるエピソードをまとめる。</li> <li>・スピーチの「はじめ・なか・おわり」を考え、構成を工夫する。</li> <li>・練習を生徒同士で聞きあい、助言しあう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の伝えたい内容を整理してまとめられているか。→ワークシート</li> <li>・聞き手に伝わりやすいようにスピーチ全体の構成を工夫できているか。→ワークシート</li> </ul>

2次 3時間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・赤、青、緑の3グループ（1グループ8～9名）に分かれて、一時間につき1グループが発表する。スピーチ発表を聞きながら相互評価をする。</li> <li>・1グループごとにスピーチの良かった点を話し合い、全体で共有する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達のスピーチから、その良さや工夫されている点を積極的に探そうとしているか。→聞き取りシート+発言</li> <li>・他者の発表の良さに気付き、自分の発表（または今後）に活かそうとしているか→発言</li> </ul>
3次 1時間	<ul style="list-style-type: none"> <li>・単元全体の学習を振り返り、自分の思いを伝えることの意義と、他者の思いを聞くことの意義について考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言語活動を振り返り、単元を通じて実感したことや発見したことをふまえてまとめられているか。</li> <li>→MYPシート+発言</li> </ul>

### 実際の指導にあたって

指導にあたって、それぞれが紹介するものは、各自が大切に思っている「たからもの」であるという点を強調した。その人の人となりを知ろうとする際、何を大切にしているか知るの大切なことである。そのためには、友達のスピーチを真剣に聞き、進んでその良さを見つけようとしなければならないということを前提として組んだ学習活動である。

多様な人々との共生を実現させるには、他者の思いを積極的に受け止めようとする「聴き手」としての態度が不可欠と言えよう。本校国語科では、「言葉は世界を拓く」という基本方針を打ち立てている。「話す力」「聞く力」を磨くことで、友達に対する理解を深め、自分自身を見直し、生徒ひとりひとりがグローバル社会へと踏み出す第一歩を固めてほしいと考えている。

### 本時の展開（5／7時）

#### 本時の目標

- ・自分の伝えたい内容をわかりやすく聞き手に伝えることができる。
- ・友達の発表の良さを認め、共有することができる。

#### 本時の評価基準

- ・適切な音量、言葉遣いを用いて、自分の思いを伝えることができているか。
- ・友達の発表を能動的に聞き取り、その良さを積極的に見つけることができているか。

#### 本時の学習過程

時間	学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・支援	評価基準
5	前時で共有したスピーチの良かったところを確認する。	赤グループ（前時に発表）のスピーチで良かった点を振りかえって確認する。	前回出た発言を、教師が評価の観点毎に分類して提示する。 ※聞き方についても確認する。	・発言

<p>30</p>	<p>青グループのスピーチを発表する。</p>	<p><b>発表者</b> 60～90秒でスピーチをする。 <b>聴者</b> スピーチで良かった点や参考にしたい点を探しながら聞く。</p>	<p>※ワークシートの使用について再確認。</p>	<p>・聞き取りワークシート</p>
<p>15</p>	<p>発見したスピーチの良さを共有深化する。</p>	<p>スピーチの良さを全体で共有し、その良さが「どの言葉」「どの工夫」によって生まれたものか考える。</p>	<p>他の生徒に気付かせたいポイントを発表者に質問するなどして補足する。</p>	<p>・発言 ・ノート</p>

## 世界共通語の光と影

国語科 山根正博

### 授業概要

単元名 人間にとって言語とはどんな存在か？

対象生徒 4年1組 23名

使用教材 柴田翔 「希望としてのクレオール」 「国語総合 現代文編」東京書籍所収  
（『希望としてのクレオール』 筑摩書房 1994年）  
鳥飼玖美子 「訳読 vs. 会話」論争をやめ日本人に合う教育を（インタビュー）  
朝日新聞 2010年10月20日

その他の参考資料

井上ひさし 「国語事件殺人辞典」 初演 1982年  
外国人のため簡約日本語“発明”へ 国立国語研、3年がかりで  
朝日新聞 1988年2月26日

### 単元の指導目標

- ・ 複数の文章を読み、接点を見出して考えることができる。
- ・ 国際舞台で圧倒的な存在感を見せる英語について、国際的な言葉となったがための負の側面に目を向け、身近な話題と関連させて考えることができる。

### 単元の評価規準

関心・意欲・態度	言語と人の関わりについて、考えを広げようとしている。
話す・聞く能力	グループの話し合いで、他者の意見をきちんと受け止め、自分の意見を伝えることができている。
書く能力	様々な文章の接点について、自分なりの考えをわかりやすくまとめている。
読む能力	様々な文章を読みながら、その関連を見出し、自分なりの考えを深めている。
知識・理解・技能	作品内の言葉の意味を正しく理解し、言語についての認識を深めている。

### 指導にあたって

#### 単元観

ことばを題材にした評論文は、具体的な例を考えやすいこともあり、高校国語の教科書にもさまざまな文章が掲載されている。しかし、国語の教科書という媒体を通さないと、言葉を考察の対象とすることもまれなはずである。母語については普段何気なく使用しているだけにその存在が身近すぎ、母語以外の言葉については、うまく使えるようになるということが何よりも意識を占めるためである。言葉という存在が強く意識されるのは、母語以外の言葉を使用しなければならなくなったときかもしれないが、そういった場面での言葉の存在意義はコミュニケーションのツールといった側面ばかりが強調されがちである。言葉が人間存在の根っこの部

分に深く根ざしたものであり、道具以上の存在意義を持ったものであるということについて、生徒の考えを深めるとともに、「言語文化に対する関心や理解を深め」(高等学校学習指導要領)することをねらった。

### 生徒の状況

附属小の生徒・その他の生徒が混在しているが、本学入学後三年以上を経過しており、出身校による違いは薄まってきている。また当該クラスはイマージョン授業を選択している生徒も多く集められているので、日本語の力にもばらつきが見られ、その点については注意を払う必要がある。

### 教材観

「希望としてのクレオール」は、日本で生活している限りあまり接触することのない、ピジンを取り上げた文章である。読解という面では、それほど難解な文章ではない。ただし、ピジンもクレオールもなじみのない言葉だけに、表面的に読み進めてしまうと、あまり理解が深まらない恐れもある。身近な問題と関連させ、我が身に引きつけて、この文章に取り上げられている問題を考えさせたい。

### 単元の指導計画と評価計画

次 (時)	学習活動・学習内容	具体的な評価規準
第一次 (四)	「希望としてのクレオール」の読解 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ピジン・クレオールの成り立ちについて理解する。</li> <li>・筆者にとってのクレオール説の魅力を捉える。</li> <li>・日本語もクレオールだという説を理解する。</li> <li>・現代社会において、クレオール説の持つ意義を考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピジン、クレオールといった語句を理解できたか。</li> <li>・クレオール説と現代社会の関係を捉えることができたか。</li> </ul>
第二次 (二)	「「訳読 vs. 会話」論争をやめ日本人に合う教育を」の読解 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「英語に対するパラダイムシフト」を理解する。</li> <li>・「国際共通語としての英語」と「地域語としてのアメリカ語やイギリス語」の違いを捉える。</li> </ul> 「国語事件殺人辞典」と「簡約日本語」についての新聞記事を読む。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで英語を取り上げて話をしてきた内容を、日本語にも応用させて考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鳥飼玖美子氏の主張を捉えることができたか。</li> <li>・日本語を取り上げた文章を読み、これまでの話題との関連性を見いだすことができたか。</li> </ul>
第三次 (三)	人間と母語はどのような関係にあるか？今後どのような関係になっていくべきだろうか？ <ul style="list-style-type: none"> <li>・「もしあなたが「希望としてのクレオール」や①～⑤の</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでの文章を踏まえて、質問について考えることがで</li> </ul>

	<p>資料の内容を記憶したまま、他の知的生命体が住む、どこかの惑星に突然移動させられたとします。新たな星であなたが習得し、愛着を覚えている言語を、その惑星での「国際共通語」に制定しようとする動きが出たとしたら、あなたはどんな主張をしますか。」という仮定の話について考え、グループで話し合い、発表する。<b>(本時)</b></p> <p>・各グループの発表をもとに、人間と言葉の関わりについて考える。</p>	<p>きたか。</p> <p>・グループの話し合いの中で、他者の意見を受け止め、自分の考えを述べることができたか。</p>
--	--	---

### 指導にあたっての工夫など

- ・日本語が第一言語ではない生徒もいるので、そういった生徒にも考えやすい例を提示することを心がける。

## 本時の展開

### 本時の目標

言語と人間の関わりについて考えを深める。

他者のものの見方をきちんと受け止め、自分の考えとの距離を考える。

### 本時の評価規準

- ・自分の考えが他者に伝わるように話せている。
- ・他者の意見をきちんと記録し、それを参考に、自分の行った主張を振り返っている。

### 本時の学習過程

時間	学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・支援	評価規準
0	前時の発問(※)と行う作業の確認と最後の仕上げを行う。	グループの主張をまとめる。	発問と作業内容の確認	
10	グループごとに発表を行う。 聞く側は聞き取りシートに記入する。	グループごとに発表する。 聞く側に回った場合は他のグループの主張をシートに記入する。	聞き取りシートの配布とその説明。 時間の管理を行う。	・自分の考えをうまく他者に伝えることができたか。 ・他のグループの意見に耳を傾け、記録をすることができたか。
40	聞き取りシートをまとめる。今日聞いた内容を踏ま	聞き取りシートをまとめた上で、自分の主	振り返りの記入に際しての注意を行う。	・他者の意見を参考に、自



50	えて、自分の主張についての振り返りを記入する。	張についての振り返りを記入する。		分の行った主張について、振り返ることができたか。
----	-------------------------	------------------	--	--------------------------

※前時の発問について

「もしあなたが「希望としてのクレオール」や①～⑤の資料の内容を記憶したまま、他の知的生命体が住む、どこかの惑星に突然移動させられたとします。新たな星であなたが習得し、愛着を覚えている言語を、その惑星での「国際共通語」に制定しようとする動きが出たとしたら、あなたはどんな主張をしますか。」

## 災害と日本人

(ESD を見据えた高校生の「古典」の授業)

国語科 杉本 紀子

### 1. はじめに

#### 1.1 国語科の授業とESDの関係

ESD (持続可能な発展のための教育) の重要性とその意義が叫ばれて久しい。学校教育の現場における実践も多く行われ、生徒たち自身も「持続可能な発展」について考える機会を多く持つようになってきている。しかしながら日常の授業においてはどうか。「ESD」という目的を特別に設定された授業や取り組みは行われていても、毎日の授業の中でそれがどれほど意識されているかと問われれば、それには疑問を持たざるを得ない。

例えば国語科における「古典」の学習は、本来「見ぬ世の人」の経験や思いを読み取り、通時的に共有できるものを見出したり古人たちの知恵に学んだりしながら、「今」に続く人間の営みを見直し、多様な価値観や環境に関する理解を深めていくべきものである。現代語訳や文法の知識はそのための一助に過ぎない。そのように考えるならば、実はこうした授業の在り方こそがESDが目指すところにかなうものなのではないかと思われる。

ここで参考としてNPO法人「持続可能な開発のための教育の10年推進会議」が提示しているESDで培いたい「価値観」とESDを通じて育みたい「能力」<sup>1)</sup>を示しておく。

#### ESDで培いたい「価値観」

- ・人間の尊厳はかけがえがない
- ・私たちには社会的・経済的に公正な社会をつくる責任がある
- ・現世代は将来世代に対する責任を持っている
- ・人は自然の一部である
- ・文化的な多様性を尊重する

#### ESDを通じて育みたい「能力」

- ・自分で感じ、考える力
- ・問題の本質を見抜く力／批判する思考力
- ・気持ちや考えを表現する力
- ・多様な価値観をみとめ、尊重する力
- ・他者と協力してものごとを進める力
- ・具体的な解決方法を生み出す力
- ・自分が望む社会を思い描く力
- ・地域や国、地球の環境容量を理解する力
- ・みずから実践する力

ここに挙げられている「価値観」や「能力」は、最終的には総合的に構築されていくものだろうが、個々には教科や科目の授業の中でも培い育む機会を持てるものである。

例えば「人間の尊厳はかけがえがない」ことや「人は自然の一部である」こと、「文化的な多様性を尊重する」ことなどは、国語科の「古典」の学習を通して日常的に考えられることであろう。『平家物語』の中に戦乱の中で生死の境にいた武士の生き様・死に様を読む時、あるいは和歌や俳句の中に読まれる自然の姿を想像する時、漢詩や漢文から多くのことを吸収し日本独自の読み方を作り上げていった古人の努力を思う時、生徒は上に挙げられているような「価値観」を培っていると言える。そうしてまた日常的にそうした学習を積み上げていくこと（特別な枠組みの中での単発の学習ではないこと）そのものが実はESDの目指すところであろうと考えられる。

## 2. 学習指導案

### 2. 1 授業概要

指導者 杉本紀子

対象生徒 6年2組 31名（内帰国生・来日生17名）

教材 『平家物語』「大地震」

『方丈記』「安元の大火」（教科書 精選古典改訂版 大修館書店）

「元暦の地震」

『武蔵鑑』

その他資料：『武江年表』・東京大学地震研究所所蔵の鯨絵など

単元名 災害と日本人（全5時間）

単元の指導目標 古典作品の中に描かれる「災害」についての文章を読み解き、日本人がどのように災害を受け止め、立ち向かってきたかを考える。その上で伝統文化としての古典の価値を再確認し、現在のことも含めて伝統文化を継承していく意義を理解する。

単元の評価規準

- ・時代背景を考えて、作品に込められた意味を理解している（読む）。
- ・細かな言葉や表現に注目し、災害に対する当時の人々の思いや態度を的確に読み取っている（読む）（関心・意欲・態度）
- ・時代を超えて共通する人々の姿勢や自然の脅威に対する考えを捉え、他者と共有することができている（読む）（聞く話す）（関心・意欲・態度）。

### 2. 2 指導にあたって

#### 〈1〉単元観

日本人は長い歴史の中で災害や飢饉にどのように立ち向かい、どのような思いをしてきたのか。それを古典の作品から読み解くことで、「見ぬ世の人」の心を思いやる力を育てたい。また、そのように通時的な形で災害に関する文章を読むことで、日本人が災害の状況や自分たちの思いをどのような言葉で書き残してきたのかを知り、時代

や社会の状況によって違う言葉の意味や力を認識させたい。それは共時的に生きる時代や社会を同じくする他者を思いやる力の伸長につながるものと思われる。6年次は入試に向けての学習を強く意識する時期ではあるが、大学入試のための演習に特化せず、実体験から遡るような古典の読解に取り組むことで、古典を学ぶ意義への理解を深め、幅広い古典の読解につなげたい。このような形での授業は2011年3月の大震災を経験した今だからこそ可能だと思われるからである。

## 〈2〉生徒の状況

帰国生・来日生が半数を占めるが、クラス全体を見ても国語力にはばらつきがある。進路の志望としても文理両方の志望者がおり、大学入試に際して古典を利用するかどうかにも違いがある。しかしながら、クラス全員が授業においては基本的な語彙の理解や文法の学習にも真摯に取り組み、これまで学習してきた和歌や随筆の読解においてもその世界観や価値観を深く読み解こうとする姿勢が見受けられる。

## 〈3〉教材観

本単元では単元設定の目的上、一つの時代に限らない形で教材を選定している。

『平家物語』は4年次5年次にも別の段を学習しており、時代背景や文章の特徴に関してはある程度既習の知識がある。今回取り上げる「大地震」の段は、教科書には採録されていないが、当時の大地震の被害の様子や人々の驚愕・苦しみ・悲しみの様子が現代の我々にも胸に迫るような描写で語られる。大地震の様子、人々の気持ちや状況がどのような言葉で語られているかを中心に読み取らせたい。

『方丈記』の「安元の大火」は教科書採録の教材である。周知の通り『方丈記』は「安元の大火」「治承の旋風」「養和の飢饉」「元暦の地震」といった四つの自然災害と「福原遷都」をあわせた五大災厄について述べている。長明はこれらの災害現場に自ら出向きその惨状を直に見て『方丈記』に書き記したとされている。生徒にはそうした背景を知らせた上で当時の災害の現場の様子を長明がどのように見ているか、災害に巻き込まれていく人々の悲惨な様子をどのような「言葉」で表現しているのかを読み取らせ、『平家物語』と比較させたい。

『平家物語』『方丈記』という中世の作品に続くものとしては近世（江戸時代）の作品・文献や絵を教材として取り上げたい。近世の作品・文献は教科書に採録されることが稀であるが、現代に近い人々の姿が見てとれるものとしても、中世とは違った人々の生活の有様が見えるものとしても教材として価値がある。

『武蔵鑑』（浅井了意 万治四年刊）は明暦の大火を取り上げたものであり、火事の際のエピソードや被災後復興に向かう人々の様子が語られる。挿絵も入っているため、当時の江戸の町がどのような状態であったのかを絵からも想像できる。

その他の近世の資料は補足的なものであるが、当時の人々が災害（地震や火山の噴火）をどう受け止め、そこから立ち上がっていったかを垣間見ることができるものである。

## 2. 3 単元の指導計画と評価計画

全5時間

次(時)	学習内容	学習活動・具体的な評価基準
<p>〈一次〉 (一時間)</p>	<p>○『方丈記』についての文学史的知識を確認する。</p> <p>○「安元の大火」の読解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・火事の様子<small>の</small>細かな描写に着目し、当時の状況を想像する。</li> <li>・本文末の筆者の言葉に込められた意味を探り、人間の営みに対する筆者の考えを捉える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『方丈記』の筆者鴨長明について知る。また作品の成立した時代背景について知る。</li> <li>・『方丈記』に記されている五つの災厄について知る。</li> <li>・火事の描写にどのような語句が使われているかに注意を払いながら現代語訳をする。</li> <li>・火事が広がっていく様子や人々が逃げ惑う様子<small>の</small>描写の特徴について考える。</li> <li>・鴨長明の言葉を通して人間生活への批判的な眼差しを感じ取る。</li> </ul>
<p>〈二次〉 (二時間)</p>	<p>○「元暦の地震」の読解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地震の様子<small>の</small>細かな描写に着目し、当時の状況を想像する。</li> <li>・本文末の筆者の言葉に込められた意味を捉え、現代にも通じる人間の態度について考える。</li> </ul> <p>○『平家物語』「大地震」の読解</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・『方丈記』と比較しながら読解を進める。</li> <li>・時代の変遷や作品の性格の違いを考えながら、『平家物語』独自の「災害」描写の特徴をとらえる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地震の描写にどのような語句が使われているかに注意を払いながら現代語訳をする。</li> <li>・自分たちの経験したことのある地震と共通している描写や現代と通じる感覚をとらえる。</li> <li>・『方丈記』の叙述の持つ記録的側面と批評的側面についてまとめる。</li> <li>・全体としては『方丈記』と類似する点が多いことに気付く。</li> <li>・『平家物語』独自の言葉遣いや表現に注目し、地震や人々の様子がどのような態度で描かれているかをとらえる。</li> </ul>

<p>〈三次〉 (二時間)</p>	<p>○近世の災害について知る ・近世（江戸時代）の「江戸」の災害の状況について知る。</p> <p>○近世（江戸時代）の作品・記録を読み解く。</p> <p>○中世～近世、現代への流れを想像しながら、日本人が災害に対してどのような姿勢で生きてきたのかを考える。</p>	<p>・明暦の大火・安政の大地震について知る。</p> <p>・それぞれの災害について記した作品や絵を見て、印象を發表しあう。</p> <p>・災害についての表現の違いや媒体の違いなどを意識しながら、文章・絵を読み解く。</p> <p>・近世の人々が災害に対してどのような姿勢・思っていたのかを考える。</p> <p>・それぞれの作品を再度概観し、災害についての描写・表現の違いや共通点を見出す。</p> <p>・時代背景と表現のあり方の関わりに気づく。</p>
-----------------------	---	---

## 2. 4 指導にあたっての工夫

- ・日本史を履修していない生徒もいるが、史実の確認に終始しないように努める。
- ・便覧・年表・図版などを活用しながら、時代背景を想像して読解を進められるようにする。

## 2. 5 本時の展開

### 〈1〉本時の目標

- ・時代の違う作品にみられる災害の様子を読み取り、その描写・表現の違いに着目する。
- ・作品の時代背景と災害の描写や語り手・筆者の言葉との関連を考える。

### 〈2〉本時の評価規準

- ・どのような言葉で災害の状況が語られているかを細かく読み取れたか。(読む)
- ・中世という時代背景を考慮して、作品の特徴や筆者・語り手の言葉の意味を考えられたか(読む)(関心・意欲・態度)
- ・異なった作品を読み比べ、時代の変遷を意識しながら災害に対峙してきた日本人の姿を捉え、他者と意見を交換・共有できたか(聞く・話す)(関心・意欲・態度)。

## 〈3〉本時の学習過程

時間	学習内容	生徒の学習活動	教師の指導・支援	評価規準 (観点・評価方法)
5	前時までの確認	『方丈記』の安元の大火・元暦の地震の内容・表現上の特徴を再確認する。	『方丈記』の表現上の特徴とはどのようなものであったかを確認させる。 文章末尾の筆者の言葉の意味を確認させる。	・『方丈記』の内容を正確に理解しているか。
20	【展開1】 『平家物語』「大地震」の章段の読解	災害の描写に注目しながら本文を音読する。 現代語訳をしながら、『方丈記』との共通点・相違点に気付く。 共通点・類似点があるのかを考える。 相違点があることで同じ災害でもどのように印象が違うか、語り手や筆者の言葉の違いがどのような「読み」の違いを生み出すかを考える。	『方丈記』との描写の類似に気付かせ、どこが似ているのかを指摘させ、なぜ似ているのかを考えさせる。 相違点を指摘させ、その違いによって、どのように印象が違うか、その違いからはどのようなことが読み取れるかを考えさせる。特に無常観がどのように見えて取れるかを考えさせる。 それぞれが考えたことを共有させる。	・『平家物語』の内容を正確に理解しているか。特に使われている語句に細やかな注意を払っているか。 ・『方丈記』と比較する視点を持っているか。 ・時代を経て変化する描写・表現に気付くことができているか。 ・考えたことを他者と共有できているか。
20	【展開2】 近世期の災害について知り、時代を経て変わっていく人々の姿勢や表現のあり方に気付く。	近世（江戸時代）の災害についての資料を参考に江戸が被災した災害（特に明暦の大火・安政の大地震）について知る。  『方丈記』『平家物語』など中世のもの	年表を示しながら概説する。  『武蔵鑑』をはじめとした近世の資料・教材の紹介をする。  中世期のものと比べて	・中世から近世への時代の変遷について理解しているか。  ・中世と近世の時代の違いを踏まえて、

5	【まとめと次回予告】	と比較し、どのような違いがあるか、なぜそのような違いが生まれたのかなどを考えてみる。  中世と近世ではその表現方法・人々の姿勢に違いがあることを確認する。	があるかを問いかける  ○『方丈記』『平家物語』『武蔵鑑』と近世期の資料の比較から読み取れたことを再度整理してみよう。	比較する視点を持っているか。  ・学習した事柄を関連付けて整理できているか。
---	------------	---	---	--

注記

- 1) 認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年推進会議」(ESD-J)のHP掲載記事より抜粋

URL : <http://www.esd-j.org/j/esd/esd.php?catid=201>

### Report on Teaching Practice in National (Japanese) Language in the First Semester of SY2012

TGUISS provides students with education based on the Japanese official curriculum guidelines and the International Baccalaureate (IB) Middle Years Programme (MYP) from Year 1 through Year 4. The Programme typically presents well-defined objectives to the students. Although the MYP does not cover Years 5 and 6, we consider these final two years as a natural extension to the MYP, with clear objectives that are similar to those applicable to the first four years. Thus, we seek to build a curriculum that ensures the development of necessary skills in students throughout the six years of learning, advancing through spirally arranged learning content and related objectives.

In making presentations, for example, Year 1 students learn the basics of presentation, i.e., effective ways of speaking and listening, in connection with “approaches to learning,” one of the five Areas of Interaction (AOI: cross-subject learning areas in the MYP, namely “approaches to learning,” “human ingenuity,” “community and service,” “environments” and “health and social education”). Year 3 students learn how to utilize and communicate information effectively. Finally, Year 6 students should be able to determine how to present data supporting their arguments and how to make a convincing presentation.



In terms of objectives, those to be achieved in Year 4, namely “to create works in a variety of text formats using structures and conventions specific to the language” and “to create works by structuring ideas and arguments in a sustainable, consistent and logical manner,” are pursued and developed further in the following two years. Students who cannot achieve the objectives in Year 4 still have the chance to achieve them in the subsequent two years.

Objectives for individual students may be clearly identified at each stage of learning as we verify the aims of learning and the achievement level of the learner before entering that stage. Vertical coordination over the years is also facilitated as the final objectives to be achieved and the steps for achieving them do not change even if the teachers or teaching materials should change.

Our challenge now is to conduct further research on the linkage between objectives and assessments, building on the insight thus obtained and accumulating practical experience each year.

The following pages present the materials used in the open class held as part of the open seminar in June 2012. The booklet distributed at the open seminar provides the MYP objectives and unit questions defined for each year.

The ensuing table illustrates the teaching practice in the national language class for Years 1 through 6 in the first semester of this school year. Since the teaching for Years 1 through 4 is based on the MYP, as noted at the beginning of this paper, the table also includes the AOI required by the MYP for unit development as well as the guiding questions for each unit.

It is up to the teachers in each year to determine the AOI to which their teaching relates. Although teaching should relate to “approaches to learning” in general, specific topics or learning activities may also relate to other areas.

国語科における単元実践例(1～6年)2012年度1学期

学年	科目	単元	教材	関連するAOI	GuidingQuestion(単元における主たる発問)・目標	
MYP対象学年	1	国語	小説	教科書 「ふろ場の散髪」	健康と社会教育	大人になるとはどういうことなのだろうか。
			随筆	教科書 「字のない葉書」	多様な環境	葉書や手紙の価値とは何だろうか。
			説明文	教科書 「ものづくりに生きる」	人間の創造性	ものづくりの意義とは何だろうか。
			プレゼンテーション	スピーチ 「わたしのたからもの」	学習の姿勢	自分の想いを効果的に伝えるにはどうすればよいのか。
	2	国語	詩	教科書 「おたまじゃくしたち四五匹」	学習の姿勢	声で思いを伝えるにはどうすればよいのか。
			編集	教科書 「情報を読む・世界を編集する」	健康と社会教育	自分の行けないところの情報を得るにはどうすればよいのか。
			随想	教科書 「昔話」	人間の創造性	記憶と記録の違いは何か。
			小説	教科書 「サーカスの馬」	多様な環境	
			和歌	古今和歌集	人間の創造性	季節や恋について人々はどのように感じていたのか。
	3	国語	随想	教科書 「最初の質問」	学習の姿勢	言葉を信じるとはどういう意味か。
			随想	教科書 「言葉の共有」	健康と社会教育	言葉を獲得するとはどういうことか。
			評論	教科書 「運動会」	コミュニティと奉仕	共同体はどのようにして作られるのか。
			小説	教科書 「握手」	健康と社会教育	人を理解するとはどういうことか。
			評論文を書く	自分の考えを伝えよう 「電子書籍を考える」	学習の姿勢 人間の創造性	理解したことを他の人に伝えるにはどうしたらよいか。 電子書籍の普及は私たちの生活を変えるか。
	4 (高1)	国語総合 (現代文)	随筆	祝福のことば	学習の姿勢	祝福とは何を対象にした行為だろうか。
			評論	情報流	多様な環境	個人とはどのように定義できるだろうか。
			評論	希望としてのクレオール	人間の創造性	人間にとって言語とはどのような存在か。
	4 (高1)	国語総合 (古典)	説話	宇治拾遺物語・十訓抄	学習の姿勢	説話や故事はどのような時代背景のもと生まれたのか。
			故事	戦国策	人間の創造性	
	MYP対象外の学年	5 (高2)	古典	随筆	『徒然草』「花は盛りに」	
和歌				古今和歌集		
漢詩				近体詩		
物語(歌)				伊勢物語 「梓弓」「初冠」「月やあらぬ」		「雅」とは何か。
物語(軍記)				平家物語「木曾の最期」		いかに死ぬか……いかに生きるか。
史伝				史記「項羽と劉邦」		
6 (高3)		現代文	評論	メディアは何を変えるのか?		テクノロジーは人間にどのような影響を与えるだろうか。
			評論	抗争する人間		人間は他者とどんな関わり方をすることができるだろうか。
			小説	舞姫		人間の主体性とはどのような様態を示すだろうか。
			評論	言語と記号		記号を通して人間はどのように外界にかかわるのだろうか。
6 (高3)		古典	和歌	万葉集・古今集・新古今集		古代の人々はどのような思いを歌に託したのだろうか。
			随筆	枕草子「上にさぶらふ御猫は」		日本人にとって動物と人間の関わりはどのように考えられてきたのだろうか。
			随筆	方丈記「安元の大火」ほか		日本人は災害とどのように向き合ってきたのだろうか。
	漢文		思想「論語」		「仁」とは何か。	

国語科における単元実践例(1～6年)2012年度1学期

学年	科目	単元	教材	関連するAOI	GuidingQuestion(単元における主たる発問)・目標	
MYP対象外の学年	6(高3)	古典講読(古文)	物語(歌)	大和物語「姨捨」	/	歌物語の発生と民間伝承のつながりについて考えよう。
			物語(歴史)	大鏡「南の院の競射」・「肝試し」		平安時代の政治的背景は、登場人物を通してどのように描かれているだろうか。
			物語(軍記)	平家物語「忠度の都落ち」		戦乱の世に生きる人間の人生観とはどのようなものだろうか。
			日記	紫式部日記		人物評価の基準は時代や環境によってどのようにちがうだろうか。
			評論	無名抄		人々の価値観や考え方は、どのような形で韻文に反映され、時代を経て変化してきたのであろうか。
			俳論	三冊子		
			俳論	去来抄		
	6(高3)	古典講読(漢文)	文章	「師説」「捕蛇者説」 「養魚記」「漁父辞」	/	自己と社会と時代を見つめる。
			漢詩	「石壕吏」		
			思想	諸子百家		「愛」とは何か。
			小説	「離魂記」		
			漢詩	「長恨歌」		
	6(高3)	国語表現	論文の基本	小論文の基本的構成	/	伝える力を持つ文章とはどのようなものだろうか。
			論証	根拠をもって論証を組み立てる		どのようなデータや資料が論証を組み立てるために有効だろうか。
			プレゼンテーション	口頭での効果的な発表とは		口頭発表ならではの工夫について考え、発表してみよう。
表現の工夫			論理的な文章と修辞法	より論理的な文章にするためにはどのような表現の工夫が必要だろうか。		